

論 考 想

「日本子ども学会」設立10周年を迎えて ～子どもの心と体のプログラムをどのように働かすか～

小林 登（日本子ども学会 理事長
東京大学名誉教授 国立小児病院名誉院長）

「日本子ども学会」“Japanese Society of Child Science”が設立されて10年になる。日本子ども学会では、子ども問題をいろいろな立場から考える基盤理念を「子ども学」「Child Science」と呼び、「子どもの人間科学」としてとした。

「子ども学」は、人間を科学的に捉えようとする立場であるが、科学的に捉える立場には大きく分けて自然科学の立場と人文科学の立場の二つがある。自然科学の立場の代表としては、小児科学、発達心理学、成長科学などがあり、人文科学の立場の代表としては、社会学、育児学、保育学、教育学などがある。「子ども学」「Child Science」は、この二つの立場を融合させた、学際的なものでなければならない。

子どもは、生物学的存在として生まれ、社会学的存在として育てられ、育つと言える。

生物学的存在は、「人間の進化」の過程で獲得した、心と体のプログラムを持って生まれることを意味する。子どもが生まれながらにして心と体のプログラムを持っていることは、胎児や新生児などの赤ちゃんの行動を見れば明らかであろう。

また、生まれたばかりの赤ちゃんは、育てる大人とのやりとりによって、心と体のプログラムを働かせながら自らの育つ力を働かせて、育っていく。子どもたちは社会の中の家庭や保育園で、大人たちにケアされながら、生物的存在から社会的存在へと大きく変わる。子どもたちが生まれながらにして持っている基本的な心と体のプログラムは、働かせながら組み合わせなければならぬのである。

このプログラムの働かせ方、組み合わせ方に、それぞれ個人差があることは明らかである。しかし、重要なのは、「愛されている」、「優しくされている」という心の安定によって、子どもの基本的な心と体のプログラムの働きは良くなり、さらにその組み合わせも良くなることである。特に、子どもが「生きる喜び一杯」の状態、心と体の基本的なプログラムをフルに働かすことが重要なのである。これはすべての子どもたちに共通する普遍的な原則である。

日本子ども学会が設立されてから10年経ち、赤ちゃんや子どもから多くのことを学ばせてもらい、子ども研究の地平は大きく広がったと思う。それらの成果を、子どもたちの生きる喜びにどうつなげていくのか、子どもたちに何を還元していくのか。新たに始まる次の10年のスタートにあたって、会員の皆様には、ぜひそのことをお考えいただきたい。

〈プロフィール〉

小林 登（こばやし のぼる）

東京大学名誉教授 国立小児病院名誉院長。東京大学医学部医学科卒業。医学博士。アメリカ、イギリスに留学。1970年－1984年 東京大学医学部小児科教授。1984年－1987年 国立小児病院小児医療研究センター初代センター長、1987年－1996年 国立小児病院院長（定年退官）。定年退官後は甲南女子大学教授《子ども学》、子どもの虹（日本虐待・思春期問題）情報研修センターセンター長などを歴任。臨時教育審議会委員、中央薬事審議会委員、日本小児科学会理事、日本アレルギー学会理事、国際小児科学会会長など、多くの政府役員、学会役員を務める。現在、チャイルド・リサーチ・ネット名誉所長、日本子ども学会理事長、日本赤ちゃん学会名誉理事長。